

鼓動するまち～人と川のつながりを感じて～

CONCEPT

都市型水害における被害の拡大の一因として日常時生活時にその水害を想定させうる構造でないことが考えられる。そこで、まち全体で「川」を感じる防災まちづくりをコンセプトとする。川には流れるところと溜まるところが存在し、両者をまちに落とし込み川を感じるデザインとした。流れを「街路」、溜まるところを人や水が集まる「コア」にすることで、川と人が互いに連動し鼓動するまちとなる。流れとなる街路は主に新目白通りや外苑通りであり、新たに神田川へと繋がる通りを設計する。溜まりとなるコアは以下のように意味内容の異なる3種類を設ける。

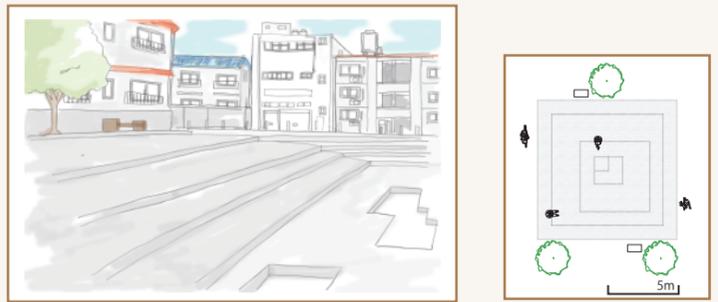
- A 神田川における親水空間であり、日常時には人が集まり、洪水時には水が集まる。
- B 主に公共施設であり、日常時は学校やお寺、公園であり、非日常時には避難所となる。
- C 街区内のコミュニティ形成空間であり、日常時には人が集まり、洪水時には水が集まる。

対象地：東京都 新宿区 西早稲田・早稲田鶴巻町・山吹町

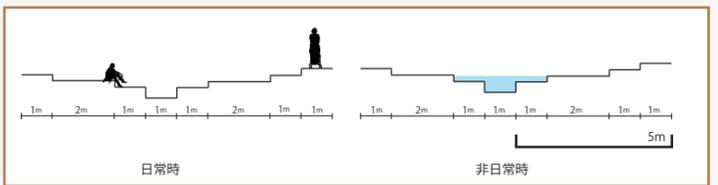
都市水害の防災を考えるため都市河川である神田川を選定した。鶴巻町や山吹町は神田川周辺地域の中でも特に予想される浸水被害が大きく、川だけではなく、まちとしてのデザインを提案したいと思ひ鶴巻町、山吹町周辺を対象地とした。神田川は以前から水害に見舞われており神田川事態の整備は進められている。しかし対象エリアは周辺と比べ標高が低く、周辺からの雨水が集まる地域である。また対象エリアは建物が密集する地域であり早稲田大学を始め学校が点在している。主要道路である新目白通りや外苑東通りは交通量が多く、エリアを断絶させる要因でもある。



溜まり場



まちの中で川の流れるために、溜まる空間としての小さな広場を設ける。この空間を住宅近隣に設置することで、日頃から住民同士のコミュニティを形成する場となるため災害時などの緊急時には住民同士の協力性の高まりが期待できる。



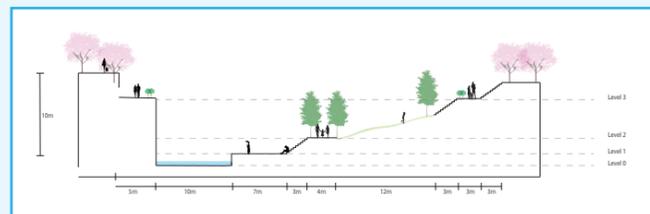
川の流れるイメージさせる街路に対して、川の流れる溜めるイメージとして表現した。T字路の延長線上に配置し、さらにこのコアの中に、川の雰囲気を感じられる広場をデザインする事で、人々が憩う、溜まる空間としての機能を提供している。通過交通を意識しながら居心地の良い空間としてシンプルな造形となっている。街路を川の流れるとして位置づけるならば、このコアはその流れる時に位置する、溜まりといえる。

この地域は浸水地区として、雨水による内水氾濫、浸水被害が懸念されるため、防災上の役割として、雨水を一時的に溜める貯水槽の機能を持たせた。また河川空間のデザインと同様、水位上昇を可視化できる段を取り入れることで、防災時にも人々が見て緊急性を判断でき、川を感じられるデザインにした。

水辺空間



神田川の現況は、水面からの高さが高くまた水量が少ないため、河川の流れる感じにくい。そこで河川幅を狭くして水深を深くし、護岸を広げ人が行き交うことのできる場を提案する。これは日常から川と接する機会を設けることで川への意識を高める。空間としてはまた神田川の名物とも言える桜もこの空間で楽しむことができる。



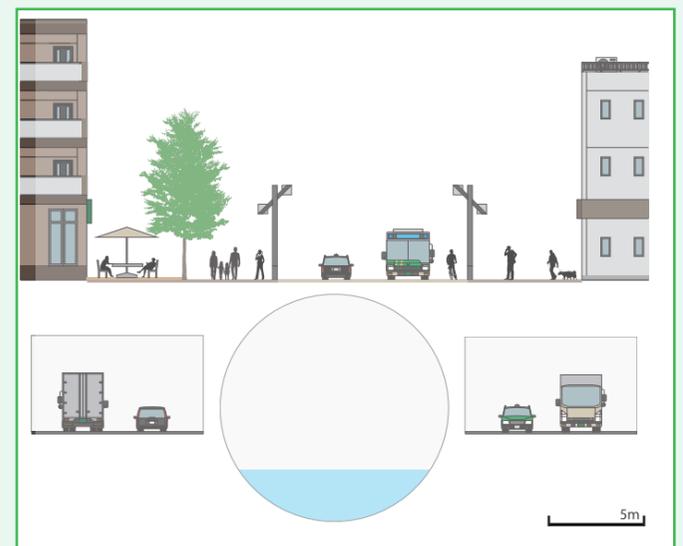
提案する空間は都市水害時の氾濫を予想し、河川空間全体を日常から人の目でわかる段階式の構造にした。行き交う人が日常の雨でどのくらい川が変化するか、また危険度が確認できるように構造にレベルを設けた。奥行き1mで考えると、レベル0では15m³、レベル1では52m³、レベル2では201.9m³の水を許容することができる。現在の神田川は奥行き1mで150m³の容量で溢れてしまうが、改修後は増水の際にも溢れないようなデザインとなっている。また、新目白通りの地下に第二神田川を設け、レベル2に達した時点で川の水を第2神田川に放出するシステムになっている。この時点で奥行き1mで考えた場合の現在の神田川の容量を超える水量を許容できる。



街路

新目白通りは、地表部分は交通を裁くためではなく、住民の交流の場、あるいは近距離アクセスの誘導を目的としたものであり、低速度交通を重点においた通路となっている。車道は片側一車線とし、路肩幅を大きめに取ることによって自転車歩道を使用せずとも成り立つ街路を目指す。自転車の車道走行を促進するため見通しの良さを重視し、またでは入の簡易性からポールによる歩車分離を行う。また、車道と歩道は段差を無くし、住民の行き来を容易にする。自動車の速度を制限するためにバンクを設置するなどの対策を行う。

一方で、地下は神田川の流水、また東西方向の通過交通を裁く。表面が質とすれば、地下は量の一面を持つ。当プロジェクトにおいてこの新目白通りの二面性は鶴巻町周辺を支える最重要インフラであり、水、車両面の流れバイパスとして機能する。



新設される通路は街路場で波を描き、川の流れるを表現すると同時に、各街区の中核に位置する避難所への誘導路として機能する。大火災、地震発生時に住民の安全を守る。また通路中央にベンチを配置し、一定距離ごとに桜を植樹し、四季を演出するとともに住民に神田川の存在を意識させる効果を狙う。この通路は新目白通りから神田川方向へ歩行者を導くいわば支流のような存在であるといえる。舗装も新目白通りから引き継ぎ、切れ目を感じさせないよう配慮する。